
Dropbehind

ziure

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dropbehind

【Nコード】

N0209Z

【作者名】

ziure

【あらすじ】

魔法が存在する世界の物語。魔法に特化する存在『六家』。その六家の中の一つの火神家から生まれた哲也。彼は魔法の力がなく火神家の一人として認められず家を追い出される……そして強くなつた哲也は学園へ足を運ぶ……。処女作です。駄文です。落ちこぼれからの主人公最強です。誤字・脱字よくあるかもです。それでも良ければぜひ温かい目で見てやってください。R-15、残酷な描写については保険です。

第一話 落ちこぼれ

この世界には魔法が存在する。魔法を使うには才能がいる。その才能は血縁の関係も大きく影響することが長い期間をかけて知られた。

その様々な血縁すなわち家系の中で火・水・土・風・光・闇、各属性ごとに特化する存在がいくつかあった。

それらから5年に1度各属性ごとに能力が高い家系を1家づつ取った存在。

人々はそれらをまとめて『六家^{りくけ}』と称した。

俺はその時『六家』の中の一つだった火に特化した家系 - 火神家

- の長男として生まれた。

名前は哲也^{てつや}。

俺は生まれてからしばらく2つ年上の姉と同年の双子の妹と過^{すご}していた……

俺が6歳の誕生日を迎える時、魔法の測定を行った。（この世界では6歳から12歳までの間毎年魔法の能力値を測るために様々な測定を行う）

俺の測定結果は普通の人たちと比べても低い結果だった。姉や妹はその測定で飛び出た結果をだしていたのにもかかわらず……

俺は自分が上手く魔法を使えてないのは前から知っていた。

両親や姉、妹からもよく教えてもらってたけど、成果はみられなかった。

でも、姉がいい成績を残していたから、俺にもいい結果が出てくれると少しだけ期待していた。

火神家の長男としていい結果がほしかった。

自分の劣等感から抜け出すためにも、^{すがり}縋りつく結果がほしかった。
この測定は現実が甘くない事を思い知らされた時だった……

そして測定結果が届いた夜の日の出来事??

「哲也、食事が終わったら私の部屋に来なさい。大事な話をする」
俺が、「はい」と返事をした後父は食べ終えた自分の食器を片づけて自分の部屋へと戻っていた。

俺はなんだろうと不思議に思いつつ待たせるのも悪いので残った飯をいつきに腹に入れ込み父の部屋へと向かった。

コンコンと2回ノックをして「入っていいぞ」という声を聞きドアを開く。

俺はそのまま父が座っていたソファアのテーブル越しの向かい側に座る。

それを確認した父は、喉を潤すようにテーブルにあったコーヒーを一口飲んでまじめな顔を向けてきた。

俺にはなんだかその顔、いや雰囲気怖さを感じてしまった。これから言われる言葉が自分の身体にはわかっていてるのかのように……

「お前には……この家から、出て行ってもらおう」

「え……? どういう、ことですか?」

身体とは違い俺の頭は唐突過ぎて意味が良く理解できていなかった。
いや、理解したくなかった。

父はそんな俺に追い打ちをかけるかのように、

「お前にはこの家の名を名乗る資格がない。要するにこの家から出て行ってもらう。これからは自分の好きな苗字を付けるといい。ただ二度と『火神』とは名乗るなよ。これは餞別だ。話は以上。明日の早朝までに出ていけ」

伝えることを淡々と告げられる父からの言葉は、今までで一番冷たかった。俺は父の雰囲気萎縮されて何もできなかった。

父はそのまま俺にかまわず席から立ち上がり部屋を出て行った。バタンというドアの閉まる音が妙に寂しく部屋に響いた。

数時間後、俺は餞別としてもらったお金を鞆に入れその日のうちに準備をし、夜遅くに誰にも気づかれぬように家を出た。その日の月の光は妙に冷たく感じてしまった。

涙は不思議と頬を伝う事はなかった……

あの日から1ヶ月くらいだろうか……

父からもらったお金もすでに無くなっていた。俺はそこら辺の隅でうずくまって泣いていた。

未だにあの日のショックから抜け出すことはできない。

「おい、その君」

誰かが話しかけてくる。

相手から話しかけてくるなんて久しぶりだ……そんな事を思いつつ俺はゆつくりと顔を上げる。

そこには一人の若い大人の女性がいた。黒目黒髪でこの世界では珍しい容姿だ。顔は見るからに美形。

背はそんなに高くないがプロモーションについては出るところはしっかりと強調されていて誰が見ても綺麗という感想を持つだろう。

「一人で泣いて……何があったの？」

「父に家を追い出されました」

「どうして？」

「僕が弱いから……ただの落ちこぼれだったから……」

「もし行く宛がないんだったら私と来ない？」

「えっ……？」

意味が良く分からなかった。

「私の所に来るかって聞いたの。君は弱くも落ちこぼれなんかでもない。私なら絶対君を強くすることができる！君には強くなれる素質がある。そんな君の才能を見抜けないむかつく父を見返してやるために私が鍛えてあげるよ」

俺に素質……？才能……？

しかも今はお金がないし、いる場所もない。これは俺にとってすごい好条件なんじゃないだろうか。

俺はとりあえず聞いてみた。

「付いて行ってもいいんですか？」

「んー……やっぱいいやだ」

「ええっ！？」

驚愕した。

「冗談だよー」

ホッとした。

「ふざけないくださいよ……」

「ごめん、ごめん。ちなみに名前は楠木くすのき香織。呼び方は……姉さん
って呼んで。むしろそう呼んじやいなさい」

「分かりました。よろしくお願いします、姉さん」

「うん、よろしくねー。それで君の名前はなんて言うの？」

「哲也です」

「苗字は？」

「ちよつと考え……そして決めた。」

「楠木です」

「そっか、んじゃ行こう哲也」

「どこにですか？」

「強くなるための修行に」

「はい。でも、俺って強くなれるんですか？」

「今更ながらの疑問である。さっきも俺に素質あるだの才能だの言っ
てたし……」

「もちろん！ただ私の修行にきちんと耐えられれば、ね」

「耐えてみせます。強くなれるならどんなに厳しくても！」

「その調子ならきつと大丈夫よ。改めてよろしくね哲也」

「はい！」

俺はそこから歩き出す……

誰よりも強くなるために……

第一話 落ちこぼれ（後書き）

感想・評価等いただけたらうれしいです。

第二話 姉さん（前書き）

開いてくださりありがとうございます。

早速お気に入り登録してくださった方、本当にありがとうございます。

誤字脱字あったら報告お願いします。

第二話 姉さん

あれからしばらく時間がたった……

俺は今15歳になり、背も伸びて身長は170前後。髪は赤色のショートで目は茶色っぽい。顔は姉さん曰く「かっこいいんじゃない？」だそうだ。身体は自分で言うのもなんだが、かなり筋肉は付いていると思う。修業の成果だ。

俺はずっと姉さんこと楠木香織に森の中でずっと鍛えてもらっていた。

まさか一度森に入ってそのままずっと森を出ることなく修行漬けの日々だとは思っていなかった……

そして俺は今、王国に向かって歩いている。どういう事情かと言われれば、それは昨日の朝に遡^{さかのぼ}るのが一番分かりやすいだろう。

- - - - -

いつものように朝食を食べる俺と姉さん。朝食時の団らんというように、他愛もない会話を重ねていく。その中で今日の修行の内容を聞いてみたら、

「今日は私との1対1よ」

「マジ？」

しばらく時間もたってからねえさんとの会話には敬語はほとんど使わないようになった。

俺からすれば本当の姉のようだったし、姉さんは姉さんで敬語を使われるのはあまり好きではないらしいからだ。

それはそれとして俺がなぜ1対1というよくある手合わせの形式の鍛錬内容に一言目で頷かないのかと言うと、力に差がありすぎるからである。姉さんはマジで強い。だから今の俺ではまったく相手にならないと思う。

確かに強い相手との戦いは学ぶことも多いのかもしれないが、差がありすぎてはどうなんだろうと考えたからだ。

「マジよ。ルールは……なんでもありでいいか」

そして軽いノリで言われた言葉に俺は冗談抜きでビビる。なんでもありとか俺死ぬかも……

「いやいやいや。よくないから！明らかに絶望という文字が目の前に見えるから！せめて少しでもいいからハンデつけてよ！」
だから、必死になってしまふのもしょうがないんだよ。

「ちなみに拒否権はなしだし、ハンデもなし。これは私があなたの師として課す最終試験だから。これ食べ終わったら早速始めるからね」

拒否権なしそしてハンデなしという言葉に俺は意気消沈してしまっただが、ともに言われた最終試験という言葉に自分のさっきまでの考えを無理矢理にでも切り替えさせた。

そして朝食を食べ終え、食器を片つけた後外に出た……

「さっきも言ったけどこれは私との修行の最終試験だから、当たり前だけど手を抜くなんて考えないでね」

その言葉を最後に姉さんから感じる殺気によって……俺は自然と身構えた。

「始める前に言っておくけどマジでやるから。死なないように気を付けてね？」

最後の言葉はおどけるような口調で言われただけが、放たれている殺

気が和らぐことはない。

「そういうわけだから、真面目にね。じゃないと……ホントに死ぬよ?」

姉さんから出ている殺気がさらに膨れ上がる。その殺気に震えている自分を自覚しつつ、そんな自分に喝を入れるため頬を両手で一回パンと少し強めに叩き気合いを入れ改めて構える。

「じゃ、始めるよ?このコインが地面に落ちたらスタートね」

「わかった」

姉さんはそのコインを俺に見せてから、親指に乗つけて、弾く。

チンツという音を立ててコインは上に舞い上がり、そして重力により地面へと落ちていく。

そして落ちた瞬間、同時に二人が動き出した……

目を覚ましたら、俺は仰向けに倒れていた。

数分の攻防の後、俺の精一杯の一撃を与えた後は防戦一方となってしまうすぐやられてしまった……

しかし、よくあの一撃が当たったもんだと思う。わざと避けずに受けてくれただけかもしれないが。実際俺の一撃を受けた後、姉さんが満足そうな笑みが見えたような気がするし。

もしそうだとしても一撃を与えたことは嬉しかった。あの姉さんに一撃を与えられたことに。負けたのは悔しいけど……まだまだ自分

には修行が必要だということが分かった。

思考するのをやめ、顔を動かして前を見てみると、姉さんは俺の目の前でニコニコしながらそこに立っていた。

なんなんだ？　と思いつながら無理矢理体を起こそうとする。俺が体を起こそうとしている様子を見て姉さんは手を貸してくれる。そして、近くにあった木に背を預けさして俺を座れせた後、一呼吸置いて言ってきた。

「合格よ」

「はい？」

いきなり言われた合格という言葉に俺の頭はついていけてなかったため素っ頓狂な返事をしてしまう。

「だから合格よ合格。あなたは私の弟子として最終試験に合格しました」

そんな俺に再度合格という言葉をかけてくる。

「どうも」

こういうときは素直にその言葉を受け取るべきだろうと思ったのでとりあえずは受け取った。

しかしなんとも納得しづらい、というかよく分からない。勝てるとは思ってないけどあんなぼろ負けしたのに合格って……姉さんの基準が分からない。

「なんだよー。もっと喜んでくれて良いのに……まあいいか。というわけで君にはこれから私が指定する魔法学園に行ってもらいます」

「はいはい……って、ええっ……！」

適当に相槌をうつていたら、まさかの展開に驚いた。

「そんなに驚くことじゃないでしょ。学園なんて普通は行くところじゃない」

「それは驚くよ。学園って普通は12歳になったら入るところじゃない。それなのに今までずっと何も言われなかったし、そのまま鍛えてもらって一人前として認めてもらったらギルドとかに登録するかなと思ってた」

――魔法学園とは文字通り魔法について詳しく学ぶ場所となっている。世界の状態や歴史についても学んだりする。大体は魔法について学びたい人が入るところで、入学できるのは12歳から。第一部で3年、第二部で3年の計6年間みっちり学ぶ。

ちなみに第一部と第二部はエスカレーター制となっていて第一部を卒業すると次の年にはそのまま第二部の一年生として勉学に勤しむギルドについては……簡単に言うところとランク付けされている自分に合った仕事の依頼を受け、それをこなすところ。まあ後々出てくるのでその時に詳しく説明しよう。

――「ギルドって言うのも考えたけど、哲也には世間についてもつとよく知ってほしいからね。後は人との交流の楽しさも」

「15歳になって今まで学園に行ってなかった俺が入ってもやっていけるの？てかまず入れるの？」

自分の思っもつともな疑問を問いかけてみた。

「入れるよ。試験とか少しあるかもだけどなんとかなるレベルには魔法について教えてるし。もしダメだったとしても私が無理矢理入れるようにするから安心して」

全然安心できないじゃん！というつつこみはなんとか押さえたが、その代わりとでも言うように仮に試験があつたとしても絶対合格してやると言う意思が生まれた。

「姉さんって、そんなに権力ある人なの？」

「さあどうでしょうね。私の素姓なんて探らなくていいから！てな訳で入ってもらうからね」

何が「てな訳で」なのかよく分からないが……

「こんな俺でも大丈夫なの？」

落ちこぼれた俺は姉さんに鍛えられて強くなったのかもしれない。けど、あらためてそういう環境に行くのは腰が引ける。それに親からの言葉を思い出すとどうしても自分がダメに思えてくる。そう考えるとだんだんと落ち込んでくる……自信が失われていく……

「大丈夫だから魔法学園行きを勧めてるんでしょうが！私の弟子と

しての合格をあなたに出したんでしようが！もつと自分に自信を持ちなさい！哲也ならやれるわ！私の、この楠木香織の一番弟子なんだから！」

そんな俺を見かねた姉さんは最初は少し怒ったような、そしてだんだんと元気づけるような口調で言ってきた。俺はうれしく思った。それに一番弟子という言葉が俺の胸にすごい響いた。不思議と自信がこみ上げてくる感じだった。

「そうだよ！俺、行くよ……学園に！！」

「それでこそ我が一番弟子！じゃあ学園に行くための準備をしましよう。明日の朝にはここを出発してもらいますよ」

なぜに丁寧語？と思ったがそれは置いておく。

というか明日にはここを出発するのか……明日の朝ねえ……

……明日？

「明日！？すごい急じゃん！！」

「しょうがないじゃない、そうしないと哲也が行く学園の第二部の入学式に間に合わなくなるのよ」

「分かった……とりあえず準備してくる」

もし俺が姉さんの最終試験に合格できなかったらどうするつもりだったんだろう……と心の中で考えていたがすぐに考えるのはやめた。背中にある木を上手く使いながら立ち自分の足だけで歩けるくらいに回復したことを確認してフラフラしながらも家へ向かった。

「はいはい、っているいろと私も準備しないと……！」

姉さんも俺の後を追うように家に向かった。

なんてそうこうしているうちに朝を迎えた……

俺は2階からいつものような足取りで1階に下りて来てテーブルの椅子に座る。

——昨日の傷については家に戻った後すぐに治癒魔法で姉さんにほとんど完全に治してもらった。疑問として「なんですぐ治してくれなかったの？」と聞いたら「忘れてた」と言われた。いたずらに舌を出すおまけつきで。

姉さんはテーブルに俺の分と自分の分の朝食を置き自分の椅子に座る。

お互いに手を合わせてから、

「いただきます」

ここでの最後になるかもしれない食事を口いっぱい頬張る俺。そんな俺を見て微笑み自分のペースで食べ始める姉さん。今日は特に会話が生まれない……

しばらく沈黙が続きそんな空気を先に破ったのは姉さんだった。

「はいこれ、私からの入学祝のお金と剣よ。受け取ってね？」

俺が1階に来る前に準備してあったようでそれを取り出して俺に渡してくる。俺はその袋に入っているお金の量に驚く。それにこの剣は姉さんの愛用していた剣……

「まだ入学できるか分からないし。それにどっちにしろこんなに沢山はつけ」

「拒否権はないから、ね」

「分かりました、ありがたく受け取らせてもらいます」

姉さんは目が笑ってない笑顔をこちらに向けた。その笑顔からはある意味ではあの時のさっきよりも恐ろしいかもしれない。ホントに怖くて拒否という行動が出来なくなってしまった……

「それとこれ」

差し出されたのは一枚の封筒

「これは？」

「学校に着いたら学園長室に行つて、これを絶対忘れずに渡してね。そうすればたぶん普通に入れる」

「うん、分かった」

「あとこれ。学園までの地図ね」

「なにからなにまでありがとう」

ホントに心の底から思った感情をそのまま言葉にして伝えた。

「いやいや、一番弟子のためだからね」

姉さんはそう言つて微笑んできた。俺はその微笑みをついじつと見つめたままになつてしまった。

こうやつて改めて見るとホント綺麗な人だと思う。思わず、

「ほら、私に見惚れてないで。そろつと出発しないといけないんじゃない？」

「そ、そうだね」

不覚にも姉さんに見惚れてしまいそうになつてしまった俺は、照れ隠しのように残つた料理をすべて食べきつて椅子から立ち上がった。

「じゃあ、行つてくるね」

「うん、行つてらっしゃい」

別れはともあつさりとしたものだった。

そうして俺は家を出た……魔法学園に向かうために……

- - - - -

という感じだ。つまり俺は今魔法学園に入学するために王国へ向かっている。

しかし王国までの道のりもまだまだ長い。

魔法学園か……不安も多いけどちょっとは楽しみだ。

そんな感情を持ちながら、俺は平原が広がる大地を駆け出した……

第二話 姉さん（後書き）

姉さんとの戦闘シーンをとばしたのはここで主人公の技等を暴露してしまうとすぐにネタバレしちゃうそうだったからです。作者のアイデアのなさをお許しください。

治癒魔法などのこの世界での魔法の解説はもう少ししたらやるので今はスルーしておいてください。
重ね重ねすいません。

感想・評価して頂けたら嬉しいです。

第三話 学園長（前書き）

開いてくださりありがとうございます。

新たにお気に入り登録してくださった方、ありがとうございます。

誤字脱字あったら報告お願いします。

第三話 学園長

俺は今校門の前に立っている。

こうやってじっくり見てみるとなんというか……めっちゃでかい。

その大きさに俺は圧倒されていた。

お口あんぐりとはこのことなのだろう……そんなことを思いつつ俺はもう一度その学園の校門に書かれているこの学園の名前を改めて確認する。

――王立第六魔法学園――

最低でもこんなのが後五つもこの国にはあるのか……さすがは王国、マジででかい。

まあこれ以上こんな事を考えるのはやめて俺は校門をくぐり学園内へと入っていった……

そして姉さんの言う通りにまずは学園長に会うために学園長室に向かった。いや、向かおうとした。

考えてみれば場所が分からないのだ。下手に探してもこの無駄に広い学園に迷ってしまう可能性も高い。

とりあえずは案内板を見つけるか、この学園関係の人を誰かしら見つけて聞いてみようと思いつつ冷静に周りを見渡したら……すぐ近くそれはあった。

なぜすぐに気付かなかった……と思ったが、俺は自分が思っていた以上に緊張してたことに今ようやく気付いた。

それも仕方がないことだろう。なにせ落ちこぼれだった人間がこんな立派な学園に来て緊張しないわけがないし、そもそも一般的な生徒でもここに入るときには緊張することだろう。

そして俺は緊張の面持ちのまま、そのまま真っすぐに『学園長室』と書かれたプレートがある扉の前に立ちコンコンと二回ノックをして中からの返事を待つ。

中から「どうぞ」というなんとも学園長に似合わない（自分のイメージだが）なんともおっとりとしたかわいらしい声が聞こえてきた。もしかしたら秘書とかそういう類かと考えながら、

「失礼します」

と礼儀に反さないようしつかりとした声をかけ、扉を開く。

「どうぞどうぞー。とりあえずそこに座って。それからお話ししましょう？」

さっきの声の主の人だ……この人が学園長なのだろうか……

「はい……わかりました」

いや学園長がこんなにちっちゃくて可愛い人なわけがない。自分の想像だとめっちゃ怖い人だと思ってたし……

ちなみにこの人の容姿は、目測だが140あるかどうかぐらいの身長で、体型は……まるで小学生のよう。顔はどう見ても可愛いといわれるだろう。髪型は金髪でツインテール。みんなから可愛がられてそんな雰囲気だ。

俺はこの人がどんな人なのか考え観察しながら、言われた通りにそこにあったソファアに座る。

そんな視線を感じ取っているのかいないのか、なんともかわいらしいしぐさを見せつけるように俺の向かい側に座る。

「私がこの学園の学園長の佐伯舞^{さへきまい}。見た目はちっちゃいけどちゃんと学園長です。まだこの職について二年目だけどそこら辺は気にしないでおいってください。それでここに来た用件はこの学校に入りたいてって事でいいのかしら？」

自分からちっちゃいのはあっさり認めてちゃっかり学園長アピール。ってこの人が学園長なのか……やはりどこから見てもそうは見えない。そんな驚愕の事実（俺からしたら）をあっさりと言われてしまった。

人は自分のイメージからかけ離れすぎているとそれを事実としてうまく受け入れることができないというが、それを身をもって思い知らされてしまった。しかしここで受け入れていかないと先が思いやられるのでなんとかその事実を受け入れ、そしてさっき聞かれた問いに答える。

「はい。僕を育ててくれた人に、ここに来るよう言われてきました。後これどうぞ」

俺は姉さんからもらった封筒を自分の鞆から取り出し学園長に渡す。

「じゃあ、拝見しますね……」

学園長は俺から封筒を受け取りそこから手紙を取り出すしてそれを読み始めた。

さっきの雰囲気から一転して、真剣な眼差しをしている。

沈黙が流れる中数分が経ち、学園長は手紙を読み終えたようでテーブルの上に手紙を置き俺に視線を移す。

「内容は分かりました。実力的に問題なさそうなので第二部からの入学を許可します。試験とかは主に私がめんどくさいので試験とかはなし」

なんだか学園長にあるまじき発言をしているような……

「それでいいんですか？」

「あなたが楠木香織に手紙通りの手ほどきをうけたなら問題ないでしょう。別の意味で問題があるかもしれませんが……あ、悪い意味ではないから安心してください。それじゃあ、これからこの学園について説明したいと思いますですが構いませんか？」

この人姉さんを知っているっぽい……少し気にはなるが今は聞くところではないと思い、学園長の問いに答える。しかしさっきまでと雰囲気や口調が変わっているなと思った。

「はい。大丈夫です」

俺の返事を聞き、学園長は説明を始めた。

「じゃあ大体は知っていることを前提で話すけど、ここは学園名の通り王国が建てた六つ目の魔法学園です。魔法を使う人たちは、若

「この学生時代が一番伸びる時期と言われています。そのために生徒達が良い環境の下で、生徒同士で切磋琢磨しあって、成長していく場。そんな環境を作るために建てられました。騎士になるにしても、ギルドに入るにしても魔法は、その人の個人の強さを決めると言っても過言ではないステータスになります。そんなわけでこの学園では、主に魔法の理論や構造を知り、実際に魔法を使ったり、生徒同士の模擬戦を行ったり……要するに魔法を常に軸として教育していきます。でも魔法だけではなく、普通の学校としての教育もしっかりと受けてもらいます。当然友達と仲間とクラスメートと過ごす日々の楽しさなども。要点だけいうとこんな感じです。なにか分からないこととか、知りたいこととかないですか？」

一通り決まったような説明を言ってもらった。話す姿はさすがにちようは学園長という感じだった。最初の会話でいい加減そうな感じの人かと思っただが、それはあの人の性格上仕方ないこと（それでいいのか？）で学園長としての公と私の区別はしっかりついているみたいだった。

それは兎も角、疑問に思っていることがあったのでそれを聞いてみることにした。

「じゃあ二つほどお願いします。一つは、僕のクラスはどうなるんでしょうか？後もう一つはここって寮生活って聞いたんですけど……どこにその寮があつてどの部屋に入ればいいんでしょうか？というか今日から使うことは可能なんでしょうか？」

「クラスについては明日職員室に来てもらってその時にあなたの担任の先生に説明してもらいます。寮の部屋についてはA〜F連ありますがその中のC連の215号室に行ってください。その部屋はすでにあなたの部屋とされています。これがその部屋のルームキーです。なくさないでくださいね？場所については校門を出て、周りを見渡せば6つ寮という感じの建物が並んでいるのですぐに分かると思います」

「分かりました。ご説明ありがとうございます。では失礼します」

今の説明で困ることはとりあえずなさそうだったので、カードキーを受け取り座っていた席から立ち上がり学園長に一礼してそのまま学園長室を後にした……

とりあえず校門を抜けて辺りを見渡すと、明らかに寮という感じのやつが5つほど並んでいるのを見つけたのでそちらを目指して歩き出す。

寮の入口に『C』と大きく書かれた看板がかかっていたのでそこに入った。

そして階段を上り最後の段を上り切り『215』と書かれた自分の部屋を見つける。

しっかりと横にあるプレートに『楠木哲也』と書かれているので間違いないだろう。

俺は鍵を開けるためカードキーを通しロックを解除して、ドアノブに手をかけ、そして押す。その瞬間……

「てーつちゃん」

とてもとてもかわいらしい学園長が俺の部屋（と思われるが少し心配になってきた）のベットに座りながら俺の名前をしかもあだ名で呼んできたのだった……

第三話 学園長（後書き）

駄文で申し訳ない……

感想・評価して頂けたらうれしいです。

第四話 部屋での会談（前書き）

開いてくださりありがとうございます。

新たにお気に入り登録してくださった方、ありがとうございます。

学園日間ランキングで五位にランクイン！！皆さんに感謝感謝です。

誤字脱字あつたら報告お願いします。

第四話 部屋での会談

ドアノブを引いてドアを開けたその時……

「てーっちゃん」

とベットに座りながら言ってきた学園長に少し困惑する。俺は学園長の方へ歩み寄りながら、疑問をぶつける。

「学園長どうしたんですか？なんでここにいますか？てかどうやって俺より早くここに来たんですか？？」

どうやら俺は相当テンパっているようだ。そんな俺の状態を気にすることもなく学園長はマイペースに、その疑問に答える。

「どうしてって言われたら哲ちゃんに会いたかったから。なんでって言われたら哲ちゃんに会いたかったから。どうやってって言われたら哲ちゃんに会いたかったから。それと学園の中以外の時は私のことは舞って名前で呼んで？」

それは疑問に答えているのだろうか？と思うような答えになってない答えを返し、さらには自分のことを名前で呼んで発言……これでもいいのか学園長！！

とりあえず俺は今の答えの意味のわからなさに心の中だけでなく、言葉としてつつこめるだけつつこむ。

「いやいやいや。どれ一つとして答えになってないですよ！特に最後の質問に対しては！！しかもなんで学園長が俺に会いたくなるんですか！？てかなんで学園長のことを名前で呼ばなければならんですか！？学園長はどの生徒に対してもそんなことを要求するんですかー！？」

なんだかつつこみ疲れて倒れてしまいそうだ……しかしそんな俺のものすごい勢いのつつこみに対しても学園長のマイペース加減は崩れることはなかった。いや、むしろ悪化してきて、

「他の生徒にはそんなことさせないよ。哲ちゃんだけ、だよ。だから名前で呼んで？」

と上目遣いで俺のことを見ながらおねだり。

こういうかわいらしい容姿をして華奢な人の上目遣いはどうしても邪険には扱えない存在感というか破壊力が存在する。それは俺にも効果が抜群に発揮されるようだった。ちなみに言っておくが俺は口りのコンではない！……はず。

「分かりましたよ……舞さん」

そう呼んだ瞬間学園長・舞さんはしてやったりというような笑顔をこちらに向けてきた。

きつとこの人は自分の容姿を誰よりも理解しているのだろう。そしてその利用方法も。今それを確信した。

「呼び捨てはさすがに無理があつたか……じゃ改めて、ここに来た理由は聞きたいことと、伝え忘れたことがあつたからなの」
最初にボソツと言った言葉は聞こえなかったことにした。

「聞きたいことですか？」

なんだろうと思う。仮にも学園長なわけだから、少しばかりは俺の個人の情報を知っておきたいということだろうか？口調もさつきまでとはうって変わったように丁寧なものとなっていてるところをみると、興味本意で聞く内容ではないのだろう。

冷静に舞さんが聞きたいこと考えてみるが、分からない。とりあえず俺は「別にいいですよ」と質問を促す。

「うん。じゃあ単刀直入に聞くけど、哲ちゃんって火神家の一人なの？」

その言葉を聞いた瞬間、俺の表情は凍りついてしまっていたと思う。なぜ知っている？どうして？と頭のなかでは疑問が飛び交っている。口にした訳じゃないが顔に出てしまっていたのだろう。付け足すように舞さんは言ってきた。

「これは哲ちゃんが渡してくれた手紙の一文に書いてあったことなの」

「えっ、ってことは……」

「そうよ。これは香織の推測、だったのだけどその様子を見ると推

測は正しかったみたいね。なんでも、哲ちゃんが魔法を使うときの魔力の波動が現火神家当主の魔力の波動とほぼ一緒だったんだって。それにそのキレイな赤い髪。他にもいくつか理由が書いてあったけど、言う必要は無さそうね」

俺は舞さんから伝えられえた言葉に相当な動揺を強いられた。

でも、その言葉を飲み込むことができるとだんだんと姉さんのやさしさを感じ取ることができた。ほとんど確信していただろうに、その事に関して一度も聞いてこなかったやさしさを。

俺は頭の中で整理がついたので、

「そうです。僕は火神家の一人です。正確には一人でした。もう僕は火神家の人間ではありません。それとできたらこの事は内密にお願いたいんですけど……」

舞さんを信用して正直にそして正確に俺のことについて簡潔に伝えた。口止めをするのも忘れずに。

「詳しいことは……聞かないほうがよさそうね。この件については語らないことを約束します」

俺は舞さんの学園長としての器の大きさに感謝の示しとして「ありがとうございます」とお礼を述べる。

「お礼なんていいのよ。でも困ったわね……この学園ってその火神家の姉妹がいるのよ……」

「えっ、マジですか……」

一体今日何回驚けばいいのだろうか。もう正直疲れてしまったと、ついそんなことを考えてしまう。

「ええ、だからもしかしたらすぐにばれてしまうかもしれないわ……」

別に舞さんが悪いわけではないのに、力になれなくてごめんなさいとでも言うようにすまなそうに言ってきた。

「それはこっちでなんとかするので心配しないでください。それで伝え忘れたことって何ですか？」

俺は今この話を続けてもどちらにとってもあまり良いことにはなら

ないと思い、これでこの話はおしまいと言うようにうち切り、次の話題へと促す。その俺の意志を感じ取ったように舞さんは俺の疑問に答えてくれる。

「あ、その事なんだけどこの学園の第二部の入学式の日程が急に変わっちゃって明日になったのよ。当たり前だけどこの学園の制服持っていないでしょ？だから明日までに制服を用意するから、学園に来たら職員室に行く前にまず学園長室に来て頂戴」

「……はい、分かりました」

なんか姉さんといい、舞さんといい、なんで重要なことを伝えるのがこんなに急になるのだろうか。

と内心呆れながらも頷く。

「じゃ、伝えることも伝えたしもう暗くなってきたから今日はもう帰るね」

『今日は』の所が妙に強調されていたが気にしないでおこう。

そう言った後、舞さんは「哲ちゃんおやすみ。また明日ねー」と言い残し部屋を出た。

廊下からスキップのような足音が聞こえた時は思わず顔がにやけてしまった。

舞さんが部屋から出た後、俺はシャワーを浴びてから明日の準備をしてベットに入り横になった。

そしてさっきの会話の中で出た火神家の姉妹について頭の中で思考を巡らせる。

（舞さんに迷惑をかけるわけにはいかなからああは言っただけど、実際ノープランだから……。もし気付かれたらどうしようか……。もし火神家に戻ってきてなんて言われたら、俺は……）

俺は長旅で少なからず疲れていたようで思考の途中でいつの間にか瞼の重さに負けて目を閉じてしまい、夢の中へと堕ちていくのだった……

ほんとにすることはなかったが

第四話 部屋での会談（後書き）

部活との連立が厳しいために更新速度が少し落ちる事があると思います。

出来る限り1日に1話を更新したいと思いますが、少し不定期になりそうです。

1話完成ごとにすぐ更新するつもりなので、どんなに遅くても3日に1話は更新する予定ですが……本当に申し訳ないと思っています。

感想・評価して頂けると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0209z/>

Dropbehind

2011年12月3日23時50分発行